

# Nara Women's University

## 感じる皮肉と伝える皮肉:そして英語のアイロニーと日本語の皮肉

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学文学部欧米言語文化学会 公開日: 2023-12-30 キーワード (Ja): 皮肉, アイロニー, 情報の認知処理 キーワード (En): 作成者: 吉村, あき子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10935/6097">http://hdl.handle.net/10935/6097</a>

# 感じる皮肉と伝える皮肉

## —そして英語のアイロニーと日本語の皮肉—

吉 村 あ き 子

### 1. はじめに

一緒に論じられることはめったにないが、アイロニー／皮肉にはいくつかの種類があり、英語のアイロニーと日本語の皮肉は異なっている。目に見える固有の形（言語形式等）を持たないアイロニー／皮肉という現象を対象にする言語学的研究において、この事実を正しく認識し、整理された全体像の中に自らの研究を位置付けているかどうかは、研究の方向性及びその結果に大きな影響を与える。筆者は、ここ数年にわたり、コミュニケーションにおける意図明示的刺激の認知処理をモデル化している認知語用論の視点から、アイロニー／皮肉を考察してきた（科研費研究 18K00650）。本稿では、その考察過程で得た、いくつかの小さいながらも重要な気づき（再認識と言った方がいいかもしれない）を3点にまとめ、その言語分析に対する意味を考える。

具体的には、第2節で、認知処理の視点からみると、①皮肉は（おそらくアイロニーも）、少なくとも、「ストーリー的皮肉」「状況的皮肉」「皮肉発話」の3種類あると想定されることを示し、第3節では、②それらは大きく、「感じる皮肉」と「伝える皮肉」に2分されること、第4節では、③英語のアイロニーと日本語の皮肉は異なること、を論じ、第5節では、以上3点の議論が皮肉の言語学的研究に意味することを考えてまとめとする。

### 2. 三種類の皮肉

人は、毎日を生きて中で経験する（あるいは、知る）様々な「事の成り行き」に皮肉を感じることがある（ストーリー的皮肉, 2.1 で詳述）。また、「特徴的な性格を持つ事物」に生じた状況に皮肉を感じることがある（状況的皮肉, 2.2 で詳述）。そしてもちろん、コミュニケーションにおいて人が発する意図明示

的刺激<sup>1</sup>としての発話に、聞き手は皮肉を感じることもある（皮肉発話, 2.3 で詳述）。

本節では、情報の認知処理という視点から、ストーリー的皮肉・状況的皮肉・皮肉発話の3種類を区別し、具体例を挙げてその特徴記述を行う。

## 2.1. ストーリー的皮肉

本稿では、複数の命題からなる「事の成り行き」(a course of event, or a story) に人が感じる皮肉を「ストーリー的皮肉」と呼ぶ。既に Yoshimura (2019) で考察したように、ストーリー的皮肉は(1)のように規定できる。

### (1) <ストーリー的皮肉>

ある人(等)が、その願望(P)を実現するためにとった行動(Q)が原因で、Pと真逆(裏腹)の結果(-P)が生じるような事の成り行きに、人は皮肉を感じる。このような事の成り行きに感じる皮肉を、ストーリー的皮肉と呼ぶ。

いくつか具体例を観察しよう。

### (2) [オバマ氏と米国の銃の売行]

2011年以降、米国では銃による殺人件数が3倍に増えた。それに伴って、FBIは犯罪の予防に特化した部署を新設。…(中略)…乱射事件の模倣犯が増えないように、精神疾患を抱える生徒へのサポートを強化する学校も増えている。しかし皮肉なことに、銃乱射事件が起きるたびに銃は飛ぶように売れていく。銃規制が強化されて「銃が気軽に買えなくなるのでは」という自己防衛の意識によるものだ。しかも、オバマ大統領は「銃嫌い」として知られ、就任前から銃規制を積極的に訴えてきた。そのため、彼が当選するたびに銃の売れ行きは上昇。(<https://courrier.jp/news/archives/8089/>)

---

1 「意図明示的的刺激」とは、認知語用論の関連性理論の用語で「相手に何かを伝えようとする意図をはっきり示して用いられる刺激」を意味する。この用語及び理論に関する詳細は、Sperber and Wilson (1987, 1995<sup>2</sup>, (同書内田他訳 (2000)), Wilson (2014) 等を参照。

(2) では、「銃嫌い」として知られるオバマ氏は、銃による殺人を減らしたいと願っている（オバマ氏の願望 P）。そのためオバマ氏は銃規制を推進する（行動 Q）。その結果、その Q が原因で、オバマ氏が当選するたびに、銃の売れ行きが上昇するという事態（銃の拡散 -P）が生じている。つまり、「銃による殺人撲滅」を願望（P）し、それを実現するために取った銃規制（Q）が原因で、P とは裏腹／真逆／対極の、銃による殺人を助長する「銃の拡散（-P）」という結果になったのである。私たちは、このような事の成り行き（ストーリー）に皮肉を感じる。一般的な言い方をすると、(1) に示したように、「願望 P を実現するために取った行動 Q が原因で、P とは裏腹／真逆／対極の -P という結果になる」ような事の成り行きに、私たちは皮肉を感じる、ということができる。「ストーリー的皮肉」である。

次の (3) にも、同じような「事の成り行き」(a course of events, or a story) のパタンが観察される。

### (3) [スマート農業]

[最先端のロボット技術や ICT を活用した「スマート農業」が実現すれば、農業の生産性を飛躍的に向上させることができ、日本の農業が抱える人手不足の問題解決につながるが、新技術に関する国の法整備が追いついていないために普及が進まない。] 航空法に基づく国交省の要領では、ドローンの操縦者に加えて別のもう 1 名が補助員として常時飛行を監視することが義務付けられており、1 台のドローンを飛ばすのに最低 2 人の人手を要します。人を減らすためにドローンを導入したはずが、かえって余計に人手を要してしまうという現状です。

(<https://headlines.yahoo.co.jp/article?a=20190412-00010000-seijiyama-pol>)

(3) では、農作業にかかる人手を減らしたいという願望（P）を実現するためにドローンを導入したこと（行動 Q）が原因で、かえって余計に人手を要する（-P）という事態が生じている。ここでも、「願望 P を実現するために取った行動 Q が原因で、P とは裏腹／真逆／対極の -P という結果になる」というパタンの事の成り行きが生じている。私たちはこのような事の成り行きに皮肉を

感じるのである。

また、これまで「運命のアイロニー」や「悲劇的アイロニー」として言及されてきたアイロニーも、事の成り行きに感じる皮肉であるので、このストーリー的皮肉に含まれることになる。次の三大ギリシア悲劇の一つ『オイディプス王』について、皮肉を感じる側面を、非常にシンプルにまとめた(4)を見てみよう。

#### (4) [オイディプス王]

コリントス王の子として育ったオイディプスは「実の父親を殺すであろう」という神託を受ける。この恐ろしい神託が現実になることを恐れ、オイディプスは、自らコリントスを去り、旅に出る。その途上で、無礼を働いた旅の一行を殺してしまう。この相手が、実の父である隣国テバイのライオス王であったことが、ずっと後になって明らかになる。神託は実現されていたのである。

(4)においても、神託が実現してほしくない(実の父親を殺したくない)という願望(P)を実現するために取った、旅に出るという行動(Q)が原因で、神託が実現する(実の父親を殺す)結果(-P)が生じている。ここでも、「願望Pを実現するために取った行動Qが原因で、Pとは裏腹/真逆/対極の-Pという結果になる」というパタン(パターン)の事の成り行きが生じている。私たちはこのような事の成り行きに皮肉を感じるのである。

Yoshimura (2019) で報告したように、このような事の成り行きの一部に当たる「願望(P)を実現するための何らかの行動Q」をとっていない場合には、皮肉の程度は大幅に減じられ、ほぼ皮肉を感じない、というアンケート結果が出た。このことを、上記の例に当てはめると、例えば(2)の文脈で、「オバマ氏が銃による殺人の撲滅を願望(P)したが、銃が拡散してしまった(-P)」というQが介在しない事の成り行きに、人は皮肉を感じないと予測され、実際そうである。(3)のドローンの文脈でも、「人手を減らしたいと願った(P)が、より人手が必要になる事態が生じた(-P)」というだけの事の成り行きには、また(4)のオイディプスの文脈では、「神託が実現しないように願った

(P) が、結局実現した (¬P)」というだけの事の成り行きには、願望 P を実現するために行動 Q を取った版の事の成り行きに感じたような、明確な皮肉性が感じ取れない、ということができるだろう。

次節では、何らかの「特徴的な性格を持つ事物」に生じた状況に人が皮肉を感じるような場合を考察する。

## 2.2 状況的皮肉

人はまた、(5a)「消防署で火事が起きた」ような状況や、(5b)「教習所の教官が、交通違反で切符を切られた」ような状況に、皮肉を感じる。このような例では、先の § 2.1 で考察したような、時間的経過を伴う特徴的なパタンの「事の成り行き」は生じていない。どこに皮肉を感じるのか分析してみよう。

- (5) a. 消防署で火事が起きた。
- b. 教習所の教官が、交通違反で切符を切られた。

(5a) に皮肉を感じるのは、火事が起きたのが消防署だからである。「消防署」という概念に関する百科事典的知識には、消防署は、起こった火事の消火及び火事の防止に特化した業務を行う組織で、そこに所属する消防士は、火事に関する専門家として、火事防止についても市民の模範となるべき人である、というような想定がある。つまり、消防署は火事が最も起こりそうにない場所、最も起こるべきではない場所であり、消防士は火事を最も起こすべきではない人である (¬P)、というような想定を人は持っている。ところが、(5a) はそれが起こってしまった状況 (P) を述べている。消防署という概念に関わる想定 ¬P と現状の状況 P が裏腹な関係にあ、「よりによって消防署で火事が起こるなんて」という意識が皮肉性につながっているように思われる。

(5b) も同様に、「教習所」という概念に関する百科事典的知識には、教習所は、自動車の運転の仕方を教えるところであり、その教官は、車の運転及び交通規則に通じ、車の運転において模範であるべきだし実際そうだろう、というような想定 (P) を人は持っている。ところが、その人が交通違反で罰則を食らうという状況 (¬P) が生じたことを (5b) は述べている。ここでも、教

習所の教官という概念に関わる想定 P と現状の状況 -P が正反対／対極／裏腹な関係にあり、「よりによって教習所教官が交通違反をするなんて」という意識が皮肉性につながっているように思われる。

次の (6) も同様に説明できる。

(6) [マルウェア感染]

著名なサイバーセキュリティと脅威インテリジェンスソリューションを提供する Verint の内部ネットワークがランサムウェアに感染した。

(<https://japan.zdnet.com/article/35136086/>)

ここでは親切に説明を添えてくれているが、Verint が「著名なサイバーセキュリティ会社」であり「脅威インテリジェンスソリューションを提供する会社」であることから、「Verint」という概念に関する百科事典的知識には、Verint 社内のセキュリティは当然優れていてウィルスに感染する可能性は最も低く、最も感染するべきではないし実際感染しないだろうという想定 (P) を人は持っている。ところが、その Verint の内部ネットワークが感染したという状況 (-P) が生じたことを (6) は述べている。ここでも、Verint という概念に関わる想定 P と現状の状況 -P が正反対／対極／裏腹な関係にあり、「よりによって Verint 自身がマルウェアに感染するなんて」という意識が皮肉性につながっているように思われる。

以上のようなタイプを「状況的皮肉」と呼ぶとすると、状況的皮肉は (7) のように規定できる。

(7) <状況的皮肉>

個体 A について、その概念に関する百科事典的知識に、「最も P であるはずだ／べきだ」という想定が含まれる場合、それとは対極の外界状況 -P が生じた時に、人は皮肉を感じる。このような、個体 A に関わる百科事典的知識と外界状況との対比に感じる皮肉を、状況的皮肉と呼ぶ。

(7) は、一般的には「よりによって A に -P が起こるとは」という状況が該

当し、A に関わる百科事典的知識 (P) と外界状況 (−P) に対極的關係が生じている場合である。上記の例でも A は消防士や教習所の教官だったように、A は何らかの特徴的な性格を持つ職業人や事業者などである場合が多い。次節では、皮肉発話を簡単にみる。

### 2.3 皮肉発話

アイロニー発話 (ironical utterance, verbal irony) は、伝統的には「意図された意味が、用いられた語によって表された意味と反対であるようなことばの綾 (figure of speech)」(OED) と定義され、ギリシア (ソクラテス)・ローマ (キケロ他) 時代から現代にいたるまで、主に修辞学において人を説得する実践的技術として研究されてきた。20 世紀末、この伝統的定義を否定し、認知語用理論「関連性理論」の枠組みで、ことばのアイロニーは「エコー的言及 (echoic mention)」であると主張した Wilson and Sperber (1981) 以降、言語学や心理学・認知科学の領域で、多様な研究が積極的に展開され成果をあげている。しかし、吉村 (2023a) で示したように、未だすべてのアイロニー発話を包括する定義は未確定で、その仕事は困難を極める。実際、Utsumi (2000) は、従来の統一的定義を求める研究の方向性は間違っているとして、プロトタイプの分析を提案している。<sup>2</sup> この点についてはここではこれ以上立ち入らない。

皮肉に少なくとも 3 種類あることを確認することを目的とする本節では、皮肉発話について、よく引用される Grice の例を挙げるにとどめる。

(8) [X, with whom A has been on close terms until now, has betrayed a secret of A's to a business rival. A and his audience both know this. A says:]

A : X is a fine friend.

([A が今まで親しくしていた X が A の秘密を仕事のライバルに漏らした。A も聞き手もこのことを知っている状況で A が言う。])

A : 「X はいい友達だよ」 (Grice 1989: 34, 日本語訳 : 引用者)

(8) は、よく引用される Grice (1989) の英語のアイロニーの例だが、日本語

2 Utsumi (2000) の詳細な吟味は吉村 (2023a) を参照。

訳でも同様に皮肉を感じる発話である。ここでは、皮肉発話の特徴記述を「皮肉を感じさせる発話」と述べるにとどめたい。

以上、第2節では、認知語用論の視点から、皮肉を、ストーリー的皮肉・状況的皮肉・皮肉発話の3種類に分類し、具体例を観察してその特徴記述を試みた。次節では、異なる視点から、皮肉が、感じる皮肉と伝える皮肉に2大別されることについて論じる。

### 3. 「感じる皮肉」と「伝える皮肉」

冒頭に述べたように、皮肉発話は固有の言語形式を持たない。例えば、二重目的語構文 (S+V+O<sub>1</sub>+O<sub>2</sub>) や分裂文 (It is~that...) が、文の形を見れば当該構文であることを判断できるのに対して、皮肉発話は、平叙文でも疑問文でも命令文などでも皮肉発話になりうる、ある意味で、非常に特殊な現象であり、河上 (2018) が指摘しているように、本質的には認識レベルの現象と見なすのが妥当である。

もう少し外に現れる様子から観察すると、皮肉には、事の成り行きや状況等に対して人が「感じるアイロニー／皮肉」と、発話によって人に「伝えるアイロニー」がある。第2節で、3つのタイプの皮肉について具体例を観察したが、(1) オバマ氏の例や (2) ドローンの例のような①ストーリー的皮肉は、誰かが誰かに何かを伝えようとするような意図も手段も関係せず、ただただ、事の成り行きを知る／理解する際に、理解する人がその理解過程で感じるものであり、典型的な「感じる皮肉」である。さらに、(5) の消防署や教習所の例、(6) の Varint のマルウェア感染の例のような②状況的皮肉も、「消防署」や「教習所」「Varint」といった概念に関する百科事典的知識が関わるが、①ストーリー的皮肉と同じく、誰かが誰かに何かを伝えようとするような意図も手段も関係せず、生じた状況を知る／理解する際に、理解した人がその理解過程で「感じる皮肉」である。

一方③皮肉発話は、「伝える皮肉」である。そもそも、コミュニケーションに用いられる発話は、話し手が相手に何かを伝えようとする意図をはっきり示して発する意図明示的刺激であるので、話し手の意図や、表情や音調を含む表現方法、さらに文脈など多くの要素が絡む伝達に貢献する皮肉であり、①②と

は大きく異なっている。(8)の裏切った友人Xの例では、話し手は「Xはいい友達だよ」と言って、「僕は親友だと思っていたのに裏切るなんて、Xはなんてひどい奴なんだ」といったような憤りを皮肉を伴って推意として伝達していると解釈される。コミュニケーションに貢献する「伝える皮肉」である。ただ、先にも述べたように、皮肉は固有の言語形式を持たないので、文脈や話し手の表情・音調などの助けを借りて、聞き手が感じ取るものであるという「感じる」側面を本質的に伴っていると考えるのが妥当である。<sup>3</sup>

以上、本節では、皮肉は「感じる皮肉」と「伝える皮肉」に2大別され、2節で考察した①ストーリー的皮肉と②状況的皮肉は「感じる皮肉」に、③皮肉発話は「伝える皮肉」に分類されることを論じた。次節では、英語のアイロニーと日本語の皮肉が異なることを見る。

#### 4. 英語のアイロニーと日本語の皮肉

近年(2023年)確信を持つようになった点は、英語母語話者の感じる irony と日本語母語話者の感じる皮肉は部分的に異なっているということである。筆者は日本語母語話者であり、皮肉の察知に直感はきくが、同じ直感で英語母語話者の言う irony 性を理解できない場合がある。概して、英語母語話者が書いた論文に使用される irony のデータのアイロニー性を理解できない例が、一定数存在する。これは、英語の irony と日本語の皮肉は、それぞれがカバーする範囲が大部分一致するが、完全に一致するわけではないということを示唆する。

例えば、日英の irony/皮肉の直感の違いを痛感した例として、状況的アイロニー (situational irony) の古典的研究 (Lukariello (1994, 2007<sup>2)</sup>) を取り上げる。Lukariello は (9) の各例を「状況的アイロニー (situational irony)」の例として挙げているが、筆者にはそのアイロニー性が理解できない。おそらく、Lukariello の irony を、日本語母語話者の皮肉の直感に基づいて理解しようとしているためではないかと思われる。

#### (9) a. A man is in a car accident with a woman, who as a consequence intends to

3 吉村 (2023a) において、すべてのアイロニー発話を説明できる理論がまだ存在しないことを示した。コミュニケーションにおける発話解釈において、皮肉が果たす役割は大変興味深い重要なトピックである。稿を改めて、急ぎ詳細に論じる。

- sue him. They have a meeting and she decides not to sue. A year later they marry. (男性が事故を起こし、相手の女性は彼を訴えるつもりだ。彼らは会合を持ち、彼女は訴えないことに決める。一年後彼らは結婚する。)
- b. A karate student pauses during a test trying to remember a move. The student gets the best score because it happens that a pause should occur at just that point. (空手の学生が、試験の最中、動きを思い出そうとして動きを一時停止する。その学生は最高点を獲得する。というのも、たまたま、休止がまさにその瞬間に起こるべきものであったからだ。)
- c. Molly had thought about a friend from grammar school just days before she unexpectedly saw her for the first time in 9 years. (モリーは、グラマースクール時代の友人のことを考えていた。ちょうどその数日後、9年ぶりに思いがけずその友人に会った。)
- d. Mitch chats on the ski lift with a stranger, a pretty woman. She is from a town where a nephew lives that Mitch has not seen in years. Mitch asks if she knows his nephew, and it turns out she just started dating him. (ミッチは、スキーのリフトで初対面のきれいな女性と言葉を交わす。彼女は、ミッチが何年も会っていない甥が住んでいる町からきている。ミッチが彼女に甥のことを知っているかどうかを尋ね、彼女が甥と付き合い始めたことが分かる。)

(Lucariello (2007<sup>2</sup>): 472-473)

(9a) の車の事故の当事者の男女が一年後に結婚することに、日本語母語話者の筆者は、事の成り行き意外性は感じるが、皮肉は全く感じない。(9b) の空手学生例についても、好運な偶然の一致は感じるが、皮肉は全く感じない。(9c) のグラマースクールの友人例についても、予知のような不思議な偶然の感じは受けるが、皮肉は全く感じない。(9d) のスキーのリフト例に至っては、たまたまりフトで乗り合わせた女性が甥のガールフレンドだったという思いがけない巡り合わせを感じるが、皮肉は全く感じない。

何度も述べているように、英語の *irony* も日本語の皮肉も、固有の言語形式を持たない現象なので、それが *irony* / 皮肉かどうかの判断は、各母語話者の

直感に基づかざるをえない。(9a-d) のような事例に対する判断が、日英の母語話者で、これほど異なることを考慮すると、安易に英語の *irony* について、日本語母語話者の筆者が、直感に基づいて議論することに危うさを感じる。取るべき方法は、英語の *irony* と日本語の皮肉に関する各直感的判断が、多くの部分は重なるとしても、母語が何かによって異なる部分があることを自覚することが必要である。筆者としては、まずは、母語話者として直感のきく日本語の皮肉に関する正確な考察・分析をすることによって、広い意味でのアイロニー現象に、日本語の皮肉の分析から貢献することを考えることが妥当ではないかと考える。

## 5. 結語

本稿では、人の認知処理の視点からみると、①皮肉が、少なくとも、「ストーリー的皮肉」「状況的皮肉」「皮肉発話」の3種類あると想定されること、②それらは大きく、「感じる皮肉」と「伝える皮肉」に2分されること、③英語のアイロニーと日本語の皮肉は異なること、を論じた。

皮肉発話／アイロニー発話は、固有の言語形式を持たず、その判断は直感に頼らざるを得ない。言語学的には極めて特異な現象である。つまり、皮肉は本来的に「感じる」ものであり、認識のレベルの現象であることになる。ことばのアイロニー (*ironical utterance* / *verbal irony*) の分析に基づいて、アイロニーを定義しようとする40年以上にわたる多くの試みが、それぞれ優れた視点を提供し、すばらしい成果を出しながらも、未だすべてのアイロニー発話を包摂する完成版にたどり着けないのは、この辺りに原因があるのではないかと思えてくる。皮肉の本質を見極めるために、何を追求すべきか、を見極める必要があるということだ。

英語母語話者のアイロニーと日本語母語話者の皮肉は、多くは一致するようと思われるが、部分的に一致しないところがあることを、心にとめて研究を進める必要がある。一方で、アイロニーや皮肉と呼ばれる認識は、どの言語においても、誰にも教えてもらうことなく、ある年齢になると理解するようになる。それは、幼児や子供が、成長する過程で様々な経験を積み上げ、社会性を身につけていくことと影響しあっている可能性を示唆しているのかもしれない。

\* 本研究は、JSPS 科研費 18K00650 の助成を受けて行った研究の一部である。

## 参考文献

- Carston, Robyn and Catherine Wearing (2015) “Hyperbolic Language and Its Relation to Metaphor and Irony,” *Journal of Pragmatics* 79, 79-92.
- Clark, Herbert H. and Richard J. Gerrig (1984) “On the Pretence Theory of Irony,” *Journal of Experimental Psychology: General* 113 (1): 121-126.
- Colston, Herbert L. and Raymond W. Gibbs, Jr. (2007) “A Brief History of Irony,” In Gibbs, Raymond W. Jr. and Herbert L. Colston (eds.) *Irony in Language and Thought*, Psychology Press, London.
- Garmendia, Joana (2015) “A (Neo) Gricean Account of Irony: An Answer to Relevance Theory,” *International Review of Pragmatics* 7, 40-79.
- Garmendia, Joana (2020) *Irony*, Cambridge University Press.
- 河上誓作 (2018) 『アイロニーの言語学』 鳳書房.
- Lucariello, Joan (1994) “Situational Irony: A Concept of Events Gone Awry,” *Journal of Experimental Psychology: General* 123 (2), 129-145.
- Morita, Yuki (2016) “Gradualness of Verbal Irony from the Perspective of Attributed Source,” *JELS* 33, 79-85.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1981) “Irony and the Use-Mention Distinction,” in Cole, Peter (ed.) *Radical Pragmatics*, 295-318, Academic Press.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1998) “Irony and Relevance,” In Carston, Robyn and Seiji Uchida (eds.) *Relevance Theory: Applications and Implications*, John Benjamins, Amsterdam, 283-293.
- Utsumi, Akira (2000) “Verbal Irony as Implicit Display of Ironic Environment: Distinguishing Ironic Utterances from Nonirony,” *Journal of Pragmatics* 32, 1777-1806.
- Wilson, Deirdre (2006) “The Pragmatics of Verbal Irony: Echo or Pretence?” *Lingua* 116, 1722-1743.
- Wilson, Deirdre (2009) “Irony and Metarepresentation,” *UCL Working Papers in Linguistics* 21, 183-226.

- Wilson, Deirdre (2013) “Irony Comprehension: A Developmental Perspective,” *Journal of Pragmatics* 59, 40-56.
- Wilson, Deirdre and Dan Sperber (1992) “On Verbal Irony,” *Lingua* 87, 53-76.
- Wilson, Deirdre and Dan Sperber (2012) “Explaining Irony,” in Wilson, Deirdre and Dan Sperber (ed.) *Meaning and Relevance*, 123-145, Cambridge University Press, Cambridge.
- Yoshimura, Akiko (2019) “Another Property of Irony: Findings from Observing Story Ironies,” *Studies in European and American Language and Culture*, 7, 15-35, Society for the Study of European and American Language and Culture, the Faculty of Letters, Nara Women’s University.
- 吉村あき子 (2020) 「アイロニー発話とアブダクション」『欧米言語文化研究』第 8 号, 43-59, 奈良女子大学文学部欧米言語文化学会.
- 吉村あき子 (2021) 「皮肉発話と感情表出」『欧米言語文化研究』第 9 号, 91-106, 奈良女子大学文学部欧米言語文化学会.
- 吉村あき子 (2022) 「アイロニー発話のターゲットと乖離的態度」『欧米言語文化研究』第 10 号, 57-76, 奈良女子大学文学部欧米言語文化学会.
- 吉村あき子 (2023a) 「発話に基づくアイロニー分析の限界」『人間文化総合科学研究科年報』第 39 号, 1-14, 奈良女子大学大学院人間文化総合科学研究科.